

2020年5月24日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「コイノニア・ハウス」

聖書：マルコによる福音書7:1～23

ここでの問題は、イエスの弟子たちが、汚れた手で食事をするのを、ファリサイ派の指導者たちが見て非難したところから始まる。「食前の手洗い」とは、衛生上の問題ではなく、宗教的な問題である。つまり、ユダヤ教の根幹としての浄・不浄の問題がそこにある。

「五千人の共食」でイエスが荒野で群衆とパンを分かち合い食事をしたことは、これまでのユダヤの汚れに対する思い、掟を考えると、どれだけ驚くべき出来事であったか。荒野には手を清める水はなく、また人から人へと、どこの誰が触れたか分からないパンが手渡された。もしイエスがそこで、自分だけ用意した清らかな水で念入りに手を洗い、一緒に食卓を囲むことの許されない「汚れた人々」を排除していたなら、たとえパンが無限に増えたとしても、それは偉大な奇跡と呼ばれてはいないはずである。イエスがそういうことを要求しなかったこと、そしてイエスのもとに集まった人々も、そういう習わし、掟を要求しないイエスの食卓を受け入れ、分かち合ったこと、それが奇跡と呼ぶべきことではないか。

ここでの問題それは、ユダヤ教が重んじてきた浄めと汚れに関する掟をまったく度外視した食卓にある。これまで汚れを背負い込まされた人々に尊厳の回復を促す食卓であった。イエスは、その開かれた食卓、尊厳回復のための食卓を催すために、おそらく、あえて手を洗うという宗教儀礼を放棄したのではないかと思う。そしてイエスに従おうとする弟子たちも、そのイエスの大胆な姿勢に倣おうとしたらうし、イエスもそのことを要求したかも知れない。「汚れた者」と烙印を押された人と食卓を囲む時、決して手を洗ったりするなどイエスは念を押したのではないか。何故なら、そこで手を洗ったとたん、「汚れた者」の烙印を押された人との間に、越えようのない溝が生まれてしまうからである。

この箇所にも、「汚れ」という言葉が何度も出てくるが、この汚れは、原語で「コイノス」という。このコイノスには、汚れを断ち切り、洗い流し、遠ざけるという意味合いが込められている。しかし、イエスは、このコイノスを「コイノニア」という言葉に変えてしまう方である。

コイノニアとは、「交わり」という意味で使われるが、ただ単に「交わり」ではなく、このコイノス・汚れを包み込み、「汚れを共有する交わり」という意味を持つ。汚れの烙印を押された者たちと食卓を共にし、手洗いを拒んだイエス。その交わりにおいて、全ての人の尊厳を保ち、屈辱や痛みや悲しみを共有しようとしたイエス。その交わりの中に神の国を宣言したイエス。そのメッセージをイエスが体を張って発し続けられたことを、このところから覚えて行きたい。(神谷)